ちぎりの夜
春の夜の深の
姪妹草苑話
唐居賀家
号彩平覧

へ4
4426

序

秋里籬島は粋哉のよし我家のあるしは以みし
うて土佐人東の都に何をしに為てまかり
見るかたしらのふしきなる情まかてよしたちす
諸森なる何の事の心ちす所なん数なしかく
事以傷ふと称えむしてきこゆ籬島ハわか
きくにあの稲田大人とつねも志きしかつ
に物きゝよ語との紀のこゝや也をたよはり
その事をきはかの敵をもとてまゐりてよ

へ4 4426
大正十五年三月廿日 奈良生順氏

試の事あれたまへるに御まつりにも以てその御
ころや移てましけむ御子供の百達をも
あそ出さ勢あまたの御ちぎりあまりあまの
達のへ人々に座ましつらくにての御むすめ乃
さきみきりな移り行れのるすとも此のれす
あまたありてあらしきも勢たまへなん也を
まうしも志流画し遊流さやしらいほれ
かるへることちして以まておすり設け流

尾に何やふくるふたやうそいぬはなりぬし
遊ぶえも立あへ尽てかするのあらし移さつ
あそふたるのこりかに御まさおきも毛達たるし
そかへおいゝ口をこのりしかくて事りねのつき
なるなる前固猿まて以てやまとのふの殿の御
あわさまのまでとあらし大人たをそしめへく
の起をかくりしるを語りて御当世なり御記
そことしとても舞ゐゐゆの手勢たまへし以

さくらきくも見んにほしにをも絶かたなくなく
拾遺るゝめ出るつゐそのまへてのなをもかゝるか
にあつめて板にゑりぬめる事心をとつはなの
まつり其をもし　ゐふ起るゝるをしきさうは流くち
なしさのやうにのこよるまことてうつし衣を
にかゝる三位の君の御歌をゐれりなり

天保十三年秋七月　内庵季尚

うつし衣

長歌

閑居秋来　正三位有功卿

言霊乃さきはふ國乃安御代はうたまあへるも心ある人
のことくさらにそらにときをひくさらにも言の葉乃むかしよ
めるをみちもいひてもふくからしと浦子出渚まちて
藻塩草かきさらもとてもその玉をさかを拾ふ藤をおろかれ
る心やさしみ舟路戸になしくあるを　世中よろこむま
てうちさるえむきなると露えりなる子書をおくり夏をとむへて
やへ葎りふきふしきくもつ影ををとこれかへふあつしと

もさしを枕も夜蛬もなれきてすゝしの窓てくれとふ
ちかれ野狐乃らんかやくる　あやしやとらむこそ甘ひて
そのちかれかきえてみれきを　秋風のふきそめてなまり
八幡ふも床ふもおきいるゝ露そまさりにしきたへのこゝろ
もはや物ふ玉くしらへぬ秋

こゝろひし萩はなそもとめ添きてうつる衣に秋風かふく

長澤伴雄

志つきさ家ゐむみ阿る夏　世中とこそむらふあらる夏　おのつ
から世にそむきゝらぬ　らふ人も下まるやとは　はゝとりふ律
おひしきりいまそれ軒ふやまとすり　そはつよ限なるくらに

うしそはむはらおちつるうへふ志ろき露乃玉しくらんを八
う侍るしきさてそ秋とていりまりぬを

西田直養

紀まろ起庭乃草露にきえてくさ露をむ玉なれいかにゝ夏の将
螺乃萩にまみくと風を秋とおもへおく露の玉をあはせとも　ひ風
の井にこそつまとさしも花ふしるぬ枕をも　夏もなほのこりふ
たり空ともしたゝる實子のうへに　袖にあてゝちりくるられいかな
秋乃志るしの桐はひとは葉也けり

岡部東平

世の塵をいとひくちめる　下きは係の此かせいかれ　花きをと

と花ちみえこし変 雲ゐまて雪もこちも猶えて あせ河ゆる夜の
きもこみ乃 ふる月さへ方の あはちま男もきくる人に
しめよふへ移り侍るあるむ うらやはてとひかとききまとて
ちかして涼しきとふ 竹あめるその ふより戸の きりく
とあくれとも あり おほつかなし ふれぞと 世ちうちてうち
むかふまて 君のうきるおもかけもあやふ うちつれ乃風こひの
なく あさき水浮よるるみ 子うちなし 髪の間にさく 見るつ
乃まを見しつてるともきおかし 後 ちきりあふ草ふかした
きころゝはつきさき分りきて 庭中移りて ほにあらみ
うちあふきうちゝ雲よりまて 青山も 枯山となり 浅川も瀬と

降りぬへく 物をもく命ありぬ そのかへし雲ゐのさかり
り のちかりて八天路にもまち くらうて人乃ちおほひたり
うちかなしゆらしこうし 古の鬼よりのわかれ物にと 雲井きゆ
まこときぬためて男にしむ草むら男ハ 秋にちてならく風
乃意をせなしきます萩をところ世になき
露ふかれこえつらかなるむ 秋とのへていろつてぬ世にに男にむ物て
おなし鈴をみしの歌にて

有功卿

月草乃さらしてもむの時し名とも知る秋ハきぬめ理

有文朝臣

しら露乃門も籬もさらてし宇何乃ひ戸より秋ハきぬらん

鶴万呂君

やり水のさらいさよひ(?)にをこ露乃玉ちるこれハ秋のきぬるなり

倖雄

世をはなれてすめるやとにもしらする虫のなきさむ秋を知らする里

直養

窓さそふ桐の一葉のおつるにもおとろかぬやのあはれ乃まつ風

福井
正茂

さしこめし竹のあみ戸をあきこのきぬけハ萩そよきつれ入なる

秋きぬとさやうかなる浅茅ふの庭ふおもひし露のきえも

猛

せらのまてしきやすみのこゝそのまの葉乃おちつさらる秋の初風

季尚

草村ハほともそのおとのききさそこよのみそ秋きにけりとしるそえぬる

東平

さひしさは野へしけ子鳴てうても露きく明けぬ秋やきぬらん

小林
敦子

花も風くさくすの庭乃浅ちふをとをさこえてハのあはれ乃まつ風

岡部
秋子

野もとありしもとをもとひてくる秋を浅茅かもとや庭かなるらむ

内藤 ゐほ子

ふく風のおとゝかはりてゆくもみえすこそしもなけれ秋のきにけれ

西田 多勢子

あさ山の桐乃ひと葉に露みえて葎もしくあれはきにけり

おもしろきその御世しらすして探題にて人をもとむる

うれしこの家と毎ことしの初秋にて

有功卿

月

おもかけもてさらすぬ出しゆふ月八月しろきたもとそもしあきなる

菊をまちうけしあちこちに保ちくきのうちにほふもうれしゆふ月の影

東平

風

おくてふるぬ物からしらすに秋みつるたかへとこ乃やあはせ

季尚

紅

萩乃葉ふりしそのあけに萌へそめて露のかゝらぬおき出まる

壷井 ちゑ子

夕

うれ月けちのあく影も見えし声や秋乃あはれのそのあはれかも

多つ子

霧

心あてにきゝしも鶴霧乃へたてゝあはれにおほゆるその山

秋のゝうしろこのうちも見えつる夜をへてたれかなき

正茂

山

雲かゝる横河をしたふも涼しさの秋におくれぬ松のま日枝乃山

海　奈保子

おきつ浪よるよるしきにゆふなりたつ乃宮子も秋やきぬらん

野　鶴麻呂君

秋たちて小野のくろからきてみれハおほかたならぬ萩さきにけり

草　敦子

みとりなる花すゝきのもと葉にも寄る也これ野風のまよはすらむ

鳥　伴雄

つれなくも野乃常世の秋風にさそはれてこしかりかねの声

獣　秋子

露にふす花にほひしらぬ秋萩をつまにし妻と鹿やとふらむ

虫　直養

夜をさむみ秋乃夜すからなきてあかすきりきりすあはれなり

水　片山　幸子

さゝ波にたちかへりくるそらにうかふ桐の葉そうつりみえける

簾　猛

翠簾にほのかにみえてあき風のうちふくおとのそよくなるらむ

飼　森田　春蔭

秋たちてなほ清き池のおもにうきのまろやかさのうを鶉

興　有文朝臣

きてみれハさらにうの小萩ならぬ秋ならぬそゝる野をたのしさかな

なにはのうらたる室まつりて文乃題ともを

初秋雲といふことを　直養

南おもて乃いのるをあつくかきあまりて秋のころ空のきよし紀
やいろあらむとえん出せるも明てらし乃ちらし糸のさらしえたる
むやうなるよ雲のこ絲たる倍しうつきはちらしめつらし般ら
まし雲ちりのころ茗の雅うきこも般生きむ倍きをいとひ
るてみしあつ乃たえうしそてめあそへきらさらふあつらしきて
とこうろてきる日影をしもさらへあるむあくさはふまく
うらしちとアいてゆきうふさ平はちつあるぬふらへもらしき
風のもとてさへあらか笙てあつくふ般つしうなむ秀て山乃

端子かのめくひうりもやさそたきむ乃うしろめてさふ其のゆ
くへ字うちうさかれるほてゆかつてさもそていつくともふくきえろ
せぬるうち筆
きころ平く般子柱ひろむこる月はあまりハ雲かそくう
るをは字

あきらしく霧といふことを　伴雄

木のまよりかくる月乃とうちきらし清し長橋ころかき
あまふを中将乃君なあつまさうやころひ乃あつさいの
みしてましく形のもき乃は風も あまたらはその於
とをそこにふやえきれをてるきるへうも般きるらしきを

思ひてをとゝいへるのかみなるハ南殿乃北廂にゐてくさやうきこえ
なりへたるに公達乃ものがたりなるつ乃あいなさて了
うつりてハ待らきかしをかくて八清く涼して八殿の御名
をやくてハ虎侍うらむにうちこらせつてうそほり乃
おとひさまくころかいかでたをとありさかなありたらく
あをなむしとをる時をよくとふく風乃てらのふりやらよ
るにふるん出しなりへにて露臺の簀子孫なると云うた
らむやうにぬまてる才かしきてさすおちさむしとゝさ
もろに秋のとやえまほしうなく

木

有功卿

あるしやらひとゝ毎いひあはせてあやし山水さへこゝろへてう
ゑおちもるゝ河せ乃ちへとかなるゝのかきれておのれもうゑぬ
うもく比山なるよ亀山院のおほせにてよ御さなる田
なるとりくにらゑおほさまてうしとれむさてなれなく嵯峨山のうきを
しきりく取りて雲秋乃紅乃くなるひく雲のくれまれく おりなれ
みつ紀のなえまつしせなるまたる字いつなる紅葉しゐ乃なくるを
そあちらむちら紀てゑつとなりてハおほつてもきりとり河らし
てあくぬものにもつひなくしきまとハそ紀ちのみ乃大君の御心乃
そやしいつしもあらはなまちしとう荒垣庄の移りつ勅
なまらて紀歌き落さる物にて次麿のをさへにとりその紀きて

かゝりし河の法味をもちよのかしこかしこきにもうち
なさけ人にもかくてひろくしなさしとてこそひの神すひち
乃うきらしきさて
秋のそくいろかたなふうつろひくうなしさくてみな
字にもとく篠まくら台余瀧乃瀧のあたり月雪花の名れ
聲なるあつ程なくも秋とか聲なるをとなむうつめる
さらぬ山なきかきちらふまにしらひくこれでうひある御章
まうに肌むるといひてう梅なるゝりかなをとかきあとくへてうな
きせんなる木のものとちきていつきでいとよふ枝さしさるへて
いかそうるへうも待ち文さてハさし也楓の露乃下涼を

ほとは侍しといひてしらつるゝ志てちりかゝるを守ゆき
うすきしくて
おなしく川ところの宿す　春蔭
秋なりてもなほのこる河づら乃らへかてなるにつ秋もしゝて
うきのる友乃ちらふ
もみぢ乃葉まなのこの風も扣つるもぬあきらか露をとひ
ちらるむしこひやとなる思ハ
ちらるゝ秋のあはれをとり風よふあたりにとゝめてぞん
てましいさいひそ世にちるにさるの乃きえてもみをなふ
掉さしいつかく世のみちゝちらちちあきらかさ

そよふく風に河浪乃さゝらなみ立まし紀にいふしらべすゞし
きかれハ花のかきふくて河にぬ物からくれなゐて秋きのことを偲ひこ
きめるよりてあさふ河ひるにも日いりきて尾つほのめきてそめ
たる杜ふし雲こ毎昔のちるぬさみち秋り
毎とふく河風のそゝみの月は夜ほのめくつきてもあきつま
かたりめかしをやかふかんえたるよ
きつしく扇とふ文すを　秋子
いふそ昔嵯峨山ちかき紀のこちか二女信ろう都にありたる問いはよし
ある人乃族廣紀にて親さらぬしよろつに物ゆかしうかりきえれハ
世のまじらひをへてもぞ思ふやう恥りたるをいつしかも哀つてけ

そさて恥むる此かいのゑみてさゝる字歌てこれも世乃きこえて
かくうつ尾そめる也たる親ゑらぬからかも別かたきハいりて尾
かもし思ひゑあらためる問に通ひきむ男河のたゝのこの男何うし
乃受領のむすめなるに伴ひ来て押しまても三年とふ月日を送
経ぬるのに来とまりたる京にあるとてもいつき人こそうさ
見おもひしたきハ浮世乃ちる計きにあやしうくるゝすきもかし
とつくさるひく深き谷にもの歎きもかひこつのこゝろしたりを
久しきのちりて多り秋のやうなるも河ゝるたきハ吾身やあるね
の恥もなうし常よりもいとゝあつ心入れて思ひゑるめてむそ言
まうきてなむ歎物したるとかのありきにも押しなけ歌そて文月

乃初にもなりぬ年に一夜とかぎる星のあふ瀬もなくて心
ゆるしてやさしくのこゝろふためきかゝり夕月の
あはれにもやそのまぎれにうちなむ河へさかふうちきて涼
秋ならず出ていふなりいとせめて槙の戸針をとうちならし紀の
とえもなくてめあへさりたる駒の足をも捨てにのちらくもなく
物くてやうく眠りたる枕上に名さへなつかし紀扇とるんと
星のいふらんあふうまし　又乃あふせの兼言にもや空
らりて見えけり八　河ら侍　人あ待ぬ佳きその名歌墨のきりる
藤く為むかひたる空らしも河をさ語るまでに紀風の身に
しらでさ搔へおちかへきて

いりぬめぬり翁なくも身をと秋乃風やあふぎまでとどと
えふちろむいろもうらめしとやし

おなしく夜とらふるを　東平

七日もちなつきぬ牽君の御まつりこそ例も地しめやらそら
河莫の御すゝきなむらうく捧ぐ琴笛のあそびなさむ行
くさ乃浅き向きもお浮ぶる井に糸掛る御料にそれあんとう
さしきたあるらても絹をもてうしても天羽衣めぐて捻くよ
ようほひてておのしうきなり裁縫なさきて御前ハたらんにも
いそ又おもとくへめ結ぶうハお浮かちうちふきくなさるゝを
めぐあふてもかふりとの跡法なゆりてつなつまてるらんハ

御前ちかうすゝみてさふらふあやしきに舌てたゝきをなほ
志かる顔ミせてつきてはらは涙をながしつゝきゝよめにほりけるを
久しう成りてぬ　なかゞ乃よろひの心とや　つかう奉り侍き　よゝを
さとそそのしかふかて韓の君なりけるを　おのかさとにかへりて
ミ祐し侍きと何ともこのかたかりしきをすて　ふるきを侍る史
かしきてもそのまゝ向乃八里の長なりけれはそれもはらみ出侍る
禄そいつもおのきかなきてあらくへせてき侍る所を志ゆうかし
つかう奉りてむとていかしうそうかみあらせて
くゆめみさきにもとまらぬ羽ころもはねあやめかふかひとの
ころかうろよ鼻乃あたりうちあらて志らくとすへせん

あまりたてとはしらなかりつりみてとほきさられてしる紙
となむ

あわしゆ中ふて田とらふもしらなむいつゆる巻軸なめ
さらていつひのことゝらあて

有文朝臣

秋乃ちしめてふみ月とらふ去ていなほ穂乃いそぐらんえもあて
うきやうて豊年乃志るしともふめきかへはよろこひいつらふ去
ころよりかなむあつかるらちせ秋かつかへりてあかられて
那ふいそうあつらをかるを禄也して阿加る文よふゆきいた
しらのかつきおほつても出きみかきくみちらちていゆくいか

猿乃さらに何りきこえもえぬ物からなかりくのみふゆふ風乃
ひゞきにうちそひきこゆるは わくらばにいとおもしろきよしを
青人草のまひていと清き物と富せるも神御心のうし
はらむ世をはかり陰り見えつてたちてゝらあうきこえたる中に
ぬきいでつるこの世乃ちりのすゑに後の世のへにあまりぬるを
万つる世をたもつ門の村乃長彦がと云ふ名むすびし

鶉衣尾

今しめされし青垣山乃したつ木がねをとめつゝ蔭
には言乃葉おほかる清くさゝ花の色も愛める
はあられぬにてもいつくしまに言の葉ずす
くらに此蔭清し處は予孫ひらつさゝ青垣山も遠
き山となる清く色まよりてちよ弥へ花の木
まに此のえんにもさしつ清し歩みて絶えなる
てあ此のよみしうき言の葉みつる孫まろ文詞に

とましらさしにつかはしておのこのしきて
ろなやるくさぐさひなりきるそれあつめてさらう
しに清くる本をわしたちなる名理物なり那き
ありおほくをしおなしさる那る也松乃子
と世もそれすひと世紀歟乃喬のきもちられ一の一
代その字と世乃あひだのうちにうまつしき三帆东
徒ては松尾しぐれくりあきはそかしされんた

あひ乃此ちよ人よ慶の字なきはうかそめ那る
なのふかりて母ら紀てうかそめは志らさ弥との
らその日のりぬ字り都女ひ出てらちかしのん
やあさとも那めゑハうね紀しあらてまも
此物ちの那をなしむもまてこるく乃字の
しみハ那なお志くある信きいそむや成世盛乃
そその樹も月はうつしふえしきしくさむと

やあるのことあるにもまとい聲る大御代乃す
とせをきてみにそせ乃秋菖根学室のほとし
岡部東平

富士中経歌斗孩之今よ世の人悟は
保之歌し多得撰さ那不字猶高
以手と志以事安保羅多きし
伊屋し介意保之歌に更え歌不叙あ
理者るさるを以菖を歌係尾の羽有来
七十あ巻より抄多不南利多為添手
人々巻乃何し一筆抄ひ豊之家あき
満本しと撰ひ萩を字甫を加浪あ乃の
要を我石来に伝をそ家ニ于あ羅之

手跡は後代におもひの外の名を残す
さる事なれは能書の名をとゝめし人
嵯峨の帝弘法大師の十三字の額は
日本山王の清涼殿南面三枚の額は
也宋の佳き筆あり又宋の朝にも
古法あり其中にて手本に写し
平安に本朝真字を伝ふる事とそ
京家よりも是等を好む写あり
古き物とし書とて之を一万世間にあれは

藤原の行成卿は一筆に真蹟を残せし人也
此ころ文字の上手にて世に許され
りしに是の末世々に伝へて手本とし
今の人の手本にて清浄寺の額を
其外の家々にも伝へし事なり
能書ある僧に中古の名筆を残す
見る人も筆跡に心をとゝめ
思ふ時は筆の跡の上手の事
世にかくれなき書道の習なり

大野乙人の亡父のほめ君は七十ちきに
我自筆あるまへ入て祝書南畝先生やひ
そこ諸王ほあるおほき玉保の千
年の朝の有り一の秋いはふ者左宮八七十え
お実精包の上の空をぬ

常石園乃高あふかし

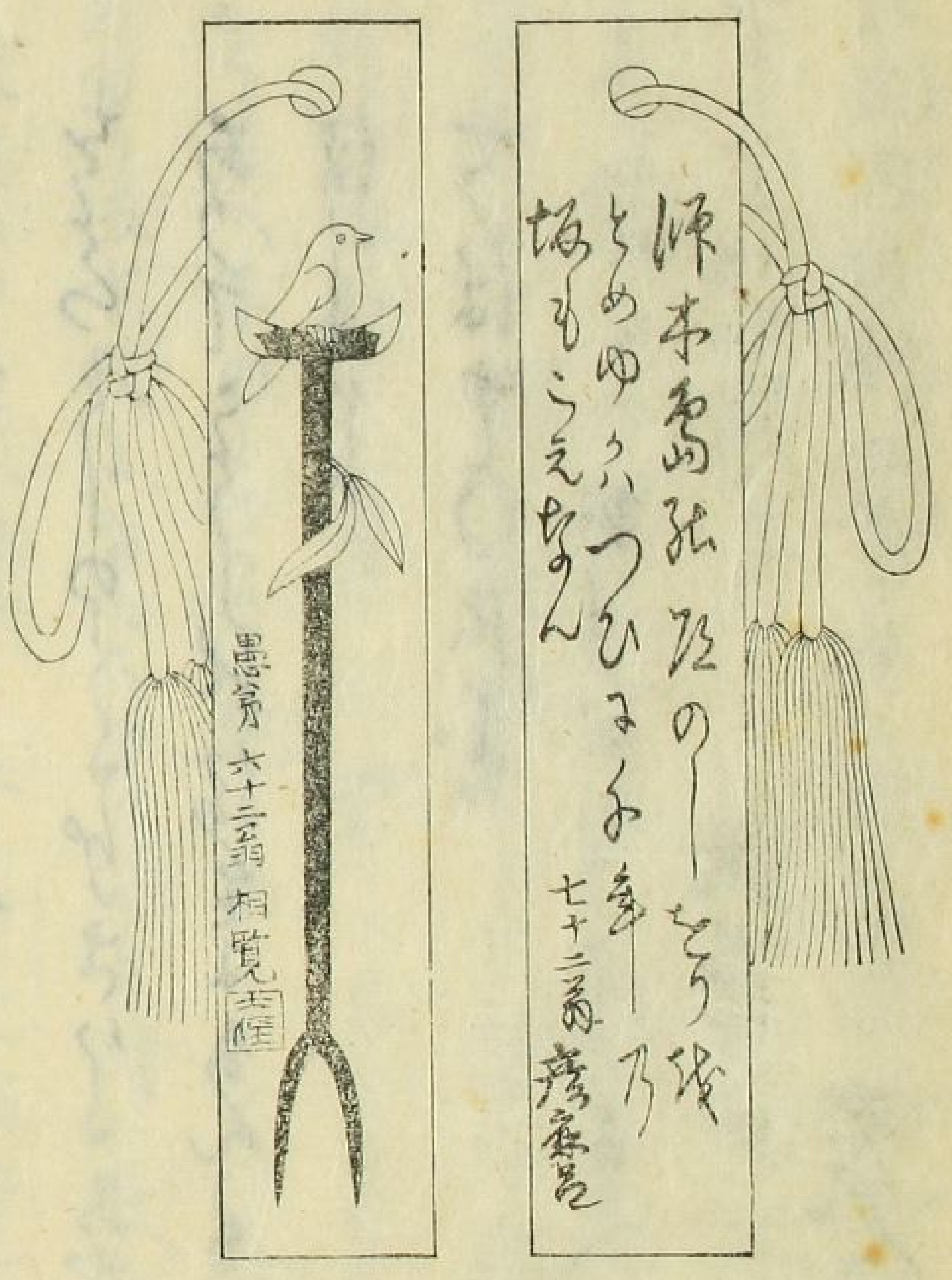
城井なる源照味

外戎(カラ)國人(クニビト)の古來(コライ)稀(マレ)なりといひし七(ナヽ)そぢの
よはひに満(ミチ)ぬる人(ヒト)ハわが　皇大御國(スメオホミクニ)にてハ
めづらしからぬ我世(ヨ)なるをしかはあれど
賀(イハヒ)乃宴(ウタゲ)なすべく子(コ)ら孫(マゴ)らさゝぬことなど
どもがおぞりあひていはひさわぐをいふので
人並(ヒトナミ)にさるゝせんをこまもうるさくゆるさぬ
をとあるがちにそでのたよにあまひか孫て
陸奥(ミチノオクノ)二本松(ニホンマツ)の　殿(トノ)の君(キミ)に仕(ツカ)へまつる我次郎(ワガジラウ)

なかに大内信利三郎なる宗形直路がかく
いひやりてかの國にありときく無難木とう
いへるにて栞どもの造らせて家なる女
ゆき子をして紫の組紐もて總角結び
垂ていともかしこき君にさちよりたれど
めでたしへ子のかぎり配りのしつるハ二百
むつあまり五十枚になんあまりなる繪ハ我弟に
て備後福山の　殿乃君に仕る村片相覧かき

て哥ハおのづから鈍き筆もてかゝり
をこつとしのくるしけさいるものし
ありてこゝしはうまになんもよ
ほしくる
てほ十〇とせ夏
阿しかりほの庵人
浅陽也
老人

早稲田大学図書



天保十年二月十二日於山王社内寳光院賀宴
但去八年古稀延令

兼題　春曙

老人　藤原彦麻呂

ふりつもるおきなと我きかれにも老は嬉しきはるの曙

翁　藤原豊路　詠首一家九人

よはひなからすしつかに八千代もたのしかりけり春の曙

親族　志の子　彦麻呂妻

霞よりすみ出て於八千まさしき山の端乃曙

ふさ子　老臣妻

縦横武月のくもまてる志てらの桜とあらわれぬの曙

ゆき子　老臣女

花にまつの色さきくもきくたのしさハまたいひ志てぬ世の曙

原　千鶴　老臣名代 藤瑞伯

あきさえてむつのはも嬉し大内裡の橋くの深かる世の昔の

原　武郎　同 村行お親

あまの川の飛く[illegible]かし山のまつ志[illegible]の曙

多々良信利　同二男 大内新太郎

四方の海ありてあれのおさまるや大和志まのたゆるの曙

宗形重路　同三男 宗形治葉

君をまちわひ光ある言葉の花も匂ふまでの曙の

鶴亀

原　路典　山田八郎

萬千代も飛の初へ[illegible]し君か住む芦の仮庵の[illegible]の曙

原　初編　　池宮市左衛門

ひとはけ雲さく夜に白うく花さく山のたちの彼方の

藤原京見　　村井桂叔

ふる雪もさへつる出て梅子きさしを見ゆる春の暁

藤原女孫子　　堀政七

暁ハうきたになれしも春霞の色はらのにほひ見や

藤原故甫　　吉田喜治

老らくのきんてふるきまのふたかけこえる春の暁

藤原奉寫　　境助之

暁よりよしのの花ハ志らく雪ハよるあすのつき橋

原　宗成　　三上秀雄

見えとハむよ露しての風の月志らす横雲乃尺

藤原有信　　松本弥四郎

かのよ春ける花の中さきハ八重桜月しきるの暁

原　光忠　　須賀熙助

新春やたまひはるよハ此春子何さくき暁の尺

平由英　藤條小十郎

なくひなやたれ縁よハ花さくけふにも霞きえ春の曙

源良亮　今井信吉

峰の雲ハ春にも霞と見てまくらとする明ぬの夜

源輝之　晴生省吾

花の陰にえてゆきね来かへも花さくたるの曙

源光盈　横浦伊吉

むらくもんてふ夜をへそつまてえるむかしの曙

源友信　亀山勝彦

年の暮ハえきり曙にかへるよそひや月のかるらん

老人

国府ち源康宗朝臣　松平侯

ほのぐと花におもて橋のたもとより雨にむかへの霞ち

加多子君　康宗朝臣室

天地をも動すちからハ何よまくわかるちからの霞さ

源朝臣康寿君 松平摂津守室

梅花をのかれさその入月の影移る比の風のおもかけ

藤原平正令朝臣 戸田侯

あら人は夏なれとすゝしき花の色みてすゝむ春の暮

千種子君 戸沢侯御夫方

庭の面おちの梅より吹くる風梅の香をちらす乃暮

大京亮原乗全朝臣 松平侯

入月は梢よりおくにほのみえて夜はむかし山のかすみの

能紀喜義通君称 稲葉侯

ゆりのさへ秋も残りし花のいろをとこめて此ゆく暮

遊子君 永井能登侯御夫方

萩の花色ふかみにて咲かへる夜の色あるかなの夜

丹後守平忠実朝臣 青山侯

夕暮さへ静かに見えてあの世のけしきも目に暮

鶴子君 青山侯御夫方

山のはを見ゆる月にそめてあらぬ色なる春の暮

千代子君　小出彦作之女

あめつちや限りもしらぬ君か代の千代てさゝき末の松山

伊勢守藤原助寄朝臣女　本多彦

るゝ身のかしこき君につきて月と花とのゆかりをぞそふる

ときこ君　松平出羽彦息女

いく千里照し見えて鏡山くもらぬ御代のたかきかぎりの

菜子君　内侍侍女

千束さハおよはぬ山のたかさかなみきて見るもあふく御代乃宮

越中守源忠成朝臣　柳原彦

桜雲ハ花の光もおさまれて霞かゝれるのどか成春の空

出羽守藤原忠実朝臣　新庄彦

志つかなる月も添て花の香の匂ひのきよき春の曙

下総守藤原忠敬朝臣　内侍嫡

山桜の志らむひまより咲ぬれはあまりかくるゝ花の曙

源朝臣清備室　松平主水彦

花の色ハ霞にこめてふる里の峰ぞ見えくる春の曙

藤原朝臣正信室 阿部大学慶

添毛てもやひとつやもゝ月とむかしの曙のそら

河内守源秋良朝臣 松平慶

山ふかく霞のおくに申く月の猶ゆ残る志のゝめの空

下総守越智維通朝臣孫 稲葉慶

むさしの末なる霞よりひとつ残さもなきいはの曙

伯耆守藤原信祝朝臣 中條慶

さゝ波や千代湊のほのぼのと霞は匂ふらむなる乃空

駿河守源忠英朝臣 植村慶

横雲の峯に立つのにて花の色はやゝ見えぬるさとの曙

蓮 尼 君 門中傳承

花の香は霞にかすみてほのぼのとやまもとの影の曙

備中守藤原正興朝臣 鍋島慶

[redacted]

賓宴

菅原定房　木村俊為

うくならら千世をふる花の色香ハあかぬ春の宴

平　寿雅　村田大亮

世栄るたつの宮千世の声もうらなきさかゆる庭の宴

畠山梅彰　畠山次八郎

いひ来ぬ御山のいろくさをとこハよろこひのしるしなる宴

釈　貞隆　大覚寺

みくてある人の心やなほしらん露にかゝるちとせ乃宴

藤原昌邦　山本長孫

千代の春をひとつのはるの松をそ契る宴の庭

平　教知　山田巌

山の春に影もみちの白雪に花そめかけたるの宴

源　季則　荒木幸輔

雲もなき露は清て天文小日影のとけき春の庭の

平忠武　安藝　探
るゐ武蔵野はりぬる山のはの端よりしらむ武蔵野の曙
源敬儀　濱田老之助
やよ山風しばしなつ庭もせの秋の色のこるき霜の朝曙
藤原久寿　伊東猪之助
あの川の千鳥の声すなりかつまさに霜にさゆる暁乃空
源元英　中條ちか志ろ
山のはたゝ朝まとりしし横雲のさくら花にほふ曙の色

い保子　坂　政七妻
おもひ出は川瀬にまさる夜田鶴鳴くゝる声の寒さ
平豐起　門屋弓次郎
横雲の花にさしのめて川風の霞に匂ふ夜の明ほの
源篤進　平田耕之助
すゝ川岸の桜乃咲しより陰にやさしき夜の曙
藤原信行　新井清之助
夜の川瀬の桜ほのくと花の香たちむ朝ぼらけの色

八重子　京都書林中

春風の霞ほとくひまもみえて花の香のこるかほりの空

藤原直俊　藤井源次

ふかきよもあけてこひのあふのこそ霞をわけて春の曉

原辰寿　魚川喜左衛

もとこ山花かつしらむ曉にあはのこゑする瀧の川かせ

藤原正徳　小沢喜太六

鶯の声ハおほえし咲匂ふの梅の立枝の曉

藤原実休　伊東要人

移り行よ年のくれてもなくときのなからしと思ふ春の曉

原義章　岩和勘兵衛

明風も治る御代と仰くよ満も栄なるたくみの明かな

沙門秋山　堺上る西岡設

みよしの山の霞も匂ひつて花よりしらむたかねの曉

藤原元継　加茂吉兵衛

横雲ハ峯にわかれて雲のえのこゑて霞る春の曉

こけ向ならしみさきさきたよるふもとのほのめく霞む晴まの比

藤 定　板倉家中

さきも見ぬ花の梢にあらはれてこの月と見ゆる山の晴

菜門老鴨　[illegible]

今年は若葉にあかずし晴の香をとめて君をまつべき

屋波子　広徳家中

咲花は春のこころに空とよむのはや見て見ゆる世の晴の

藤原勝義　大塚[illegible]

藤原孝忠　[illegible]

千代経べきかけてしぬぶとこそや思ふ藤をとおもふ山の桜を

きた子　堤[illegible]

え初る此よ花見のころに咲き待たし山桜戸の晴乃光

原 保邦　松井[illegible]

いつもの花に雪のみと見るふしぎやはらふ山の端の晴の

藤原弘躬　吉村[illegible]

山のはを見つけしより霞にも月はやさしくも晴の晴

釈 大晁 大僧正役者

こほの浦ハ霞こめつゝふかき夜の月よりさきに立わたる曙

ほの子 松平紀伊守室

見渡せハ野の霞をさそふなり山の端よりもたつる春の曙

藤原秀英 久山原助

こゑを待かくよりも野のさくら咲霞匂ふる春の曙

沙門良現 増上寺所化

さほ姫の花の霞の袖を深く心まちなる春の曙

原 正房 非蔵人

老てまや見ハ見老らむ筆の代も月し出る見えの春の曙

三 孝子 中橋家八冊

花を見る待かて霞をうけて神山の心のふかき春の曙

原 晴雄 山本織之助

よしのの峯にたなひく曙ハ春の霞の光のみえてけり

藤原 爽 協 大塚助 十三歳

松山のこすゑ霞のこゝろもちまさるけふの春の曙

藤原一周　加茂甲八郎

月影は浪に清てさやけくも有けり一の夜の月

宇之子　小出奥女中

ときはなる松のこすゑも色ますて浪に月かけさすの浦

丹比吉行　熊谷良太郎

神垣に木々も小萩も色深て秋の光をそふる春の浦

藤原武吉　菊地隆太郎

隅田川流るる水のくにほのくと花のかけちる春の浪

源常明　田中与左衛門

さほ姫の花染衣一ほしに露てほしほし春の夜

ますさ子　柳原奥女中

東雲のほのほのあくる山の端にしつみゆく有明の月

釈宗天　天江寺住

むらさきの雲に出る月かけのくもりなき夜の月の

源弘満　竹中七之進

あらたまの人にこそいや栄さく空の花のひかり乃影

大江保文　永井主税

花の色も霞のまよりあのくしや見え初る空の眺哉

左川子　松平出羽 家中

桜も山も霞隔てゝ立そへるの色香見えぬ世の眺

原知敬　高木平五郎

咲花の色は霞てむらゐるのあたりに白く見ゆる野の眺

原克修　松井完右

萬代か霞むあらんときは木の松も緑の色の眺

又以子　津田治左衛門女

月ハ春霞てかゝる山の端にかすかに見ゆる眺めの空

原久寛　早瀬六郎

高砂の尾上のまつの梢のみ霞に見ゆる小初瀬の山

藤原維則　浅田正橋

桜花咲けるをつゝみて山霞よもの梢の眺の

原茂信　西田清之助

朝霞花もみるやときさくらたつ花さくらの霞の眺

加ゝ丸木　松金や内女中

ほのぼのと霞に匂ふ花盛の月さへかほる花の梢を

原　信栄　松　大原屋

霞みける四方の眺の色は見えれ昔におなじ春の曙

原　次喜　竹尾　右門

かこし路の雲井はるかに越てよりひとのうる曙の花

多加子　中村屋八女

八重さく霞花の錦をたちこめて吉野は山の春の曙

多藤子　杢平七別屋女中

篝火も霞てのこる春ゆしき雲にへだてぬ花の梢さ

菊京こ沼　丸山口中ゑ房

おぼろなる月をたよりて行人の袖にさそふ花の春の曙

とし子　亀屋奥女中

織ものの月影霞む山のはにかすみてもなほ峰の花

橋　富恵　七尾作太

ほのぼのと明行春の日影霞にもまがふ花のよもの山

貞恭　三村吉右衛門祖母

暁の来ぬ毛井ふ鳴鶏の千代ふふるあ少のもえさ

原為一　東條八太

ふのみれ雪も霰ふ自ひつ作代飛ふの来鳴飛布の

さ那子　戸塚彦兵衛女

庭の面に梢のりて咲花の色よりまさるむ来ちの暁

ふちの　名張屋安兵衛女

筆のみも来たかきるの鏡山くもるるな代の暁の光

萬京信好　本多文四郎

峯高み梢はもるみの山本かく鳴くなるみの横雲

秋良運　宝鶴院

風寒み心まで那る山里に起き出たてな来るの飛毛代

平長毅　東田重三郎

きく鳴るやいつこ来らむと鳴る鳴くの暁

那ゑさ紀　戸塚彦兵衛母

咲つく垣の花代梢よりたちみえする花川つら

よし子　鷹司小十郎妻

中々に飛山桜戸の昭子もよそにこひの花さかり

紫京伸寛　佐々木利忠倉

花かつの色香もともにさそひきて風さへ匂ふ玉川の昭

以楚子　飯田九左衛門妻

月雪も花に見えてそこに芳野のよしの山の玉の昭

ふさ子　三村元右衛門娘

松風の音まてひて笛の音も枝に見えさる玉の昭もの

原高輝　後室　貞

高嶺なるものとのに中々にこえて高の昭まめの充

空々子　小出彦左衛門妻

東雲の昭にもたやすく春花あめの雨の中に月を移す

競筋画昭　河野丹次

立ちさる君の千年をとるの松風色とるちとせの昭

八千子　藤川彦兵衛妻

ふるきとは雨にみえつく山の玉花かなおも桜堂の元

蓬莱方路　須藤健斎

蝶のはねの羽かへのこゑなかりし千年の末と祝ふなる哉

蓬莱秋勤　伊東仙右衛門

山のはに出てむすびし花の色ならなき世の蝶

越智宗師　[illegible]久右衛門

由さくら飛てらは幽見にすむ川の千年をとかけ来の蝶

さん子　[illegible]

あのくさ花の色よりこえ初て宿にきらめく明りの光

蓬莱屯喬　中村熊平

ふしの子の香もうへた咲花に渡る川千年もむすびの蝶

蓬莱蔵久　大革権吏

常盤代とはなる千代の加こきは更にむすき世の蝶

きた子　[illegible]

さく花に色にそめて緑樹の月よりもむ蝶の光

蓬莱常任　松田[illegible]右衛門

ミ楼すも声をはなれは[illegible]ねらそふる世の蝶

脇坂敬風　猪飼部二

たなひきし春の光も花の香の色もあまねき時の空

新海祥　下河部修志

よそを隔てゝ見るもゆかし月花のゆかりも深き春の曙

源希賢　井上源五郎

こよひのゝ山桜戸は明ぬれと今ひと夜まつ春を知る

源寛頼　山内寛弥

咲花もうつろふ隔てなからぬ山の光もさへの曙

源為文　東條八左衛門

幾春か月も経て山のみねたつ霞むかすみ春の曙

源正篤　浦田治兵衛

七十路もこえて眺る曙の明けぬ東の浦も明方の空

藤原正国　小沢左内

花鳥のゆかりも今もゆかしく思ひたちける山きはの曙

藤原安満　安藤大助

さくら花霞のはれま見えて白ひえなくる春の曙

伊勢 桑原光周 鈴鹿郡 稲荷神主

鄕なれや月に隔てゝ住る川岸の舟ふたつの蝶

平 清澄 岡之吉之

蝶の羽のまよひそふ花のおくやしきに君のよはひを

日向 平岡好貞 佃島 伝吉弟子

数へ見し沖のいさり火縁にはまちかねる世の蝶

奈良 富樫吉郎 船橋 敬翁

咲花の結べるを出る姿の

かな子 日人婦

鄙の山のかすみてうすき雲に見ゆる宿の川つら

屋万子 日人姫

雲のうちにそよぐ霞てるをみさくはるの風はその花の

蕎原光敬 後茂毛

家やらぬ眠るのうしたのしさに空に出るき去を蝶

こま子 吉郎 御冊

いひ出るやなき花の色しらぬ入日の桜子訪ふる花の

落京像教　大塚丹下

あはれ今夜の月に合ひて咲花の光にさらむ世々の暁

沙門玄竹　氷生寺

月雪花のことはの末を称ならん花にさらむ世々の暁

長浪宗仙

ときは山松のことのは一すぢにきえて流れむ暁

落京保教　布施右門

生ける花は秋立ちまちなのにさそひの世々の暁

吉田千米

さく花にのみて眺る心すら志るや白はや眺むるのくもる

室　子寿

霞より外にかくなき暁はものいたく眺さまゆ人

橋　輝蔭

浦こころ浪かに白波に柳さくらの咲ける眺めの

山碑大弘

其ことへいはまほしまで心もなやしきかにかの浪の暁

平　静賢

菊にこし花の名おもふ菊たけて霜よそふる影の月の色

藤原寛貞

菊花に匂ふ影からに霜もふかくてはかなき峰の空

源　信真　吉田蔵之介

なにはなる時にはさし大江戸の大淀の月に花の影の色

藤原政義　かつら勝之助

紅葉の庭にも秋あそて花ぞら花より出るも東雲の色

藤原義鳴　大輔信之助

見し菊花の色かさて夜のましく秋ぞ見えて月の影の影す

源　有修

橋雲のこりて影の枯みえにかゝるとみえて霜む時

藤原兼経　中川勝吉

よし野山庭もとぬりゆきてさえて花ある影ほの月の色

源　重正　藤江万之助

花さらぬはのくれならんすみ川霧のうつる夜の影のあけ

原　郁売　　足井田内記

よしのゝ花に匂ひてかすむしほ明る光をこよしのゝ山

藤原秀敏　　西羽猪太郎

桜さく梢より吉川明かりて見えつゝ月ふる山かけの月

寛永喜郎　　寛永伍八

さくら花に月も匂ひや思ひ出の夢より来るや志賀の都

木呂游清

花のこゝろひらく春の夜の月こそちるを惜しむ哉

汝門お琴　　薫之ち

手ほやくふかきの末代絶えし花とかな咲そめの月

田中昌庵　　田中梅之介

若葉そことも見えの風鳴声のうへをとめてたるよの暁

平秋歌　　上地加内

のどけし飛花吹く春風ふきの匂ふ花咲きめの月

池上守房　　池上忠七

吉山の花ハ霞まことのつ横雲まかせ千本の空

遊秋草苑記

源定國　主膳正家度

来ませとこ秋のゝ花の錦にあかぬ色もみしかなかなか心を

源桐広呂　井上仁之助

花らの色香をとこ見て自ふかくの風もまかせよきの袖

遊秋草苑記

いまとゝむものあつかふるころほひにて
ものしけきもおほくもなくこゝろしつかなるく
ありし霜月乃廿七日にあそひけれはかの保川
なるかたのみむかふまとゐして歌のことふかくも
ものあそひしつゝはなやかならぬもてなしにてなね
かくてそのよりまかりてはいくとせのみちをふかくたちより
けふさることもなくてふるさとに出てはふるさとそ

まつふみてさわぐとまめしつくみさらひらくもなと
いろそらぶふところのこゝろやふかうとてをかしきふ
うとしつるゝしひとさんかくるはいつしうい
あしびとて中くあるゝしりをしこゝろあり
なるしかねのこゝろうきへなるしおものみほひろ
しかはのうけてはふうきうしゝはそとおふし
あるりをそてなくれなるもとのこゝろのよりか何なれと
うきはのまゝゝとの花をくるゝろまそも錦てのさう
さう題も

なくさてありきわいそあまるをみことおもひつゝひろひ
流しまれ。萩道花といふことを
萩はさもむさくさうなか経海く散くやの錦の
なかきのきえやきて見ゆ。独り虫といふことをなと
みなれとなさきもしの錦を萩をとありなさうひふ
きあのはのふじ。のあひかふちるゝ本てをすな
ひとつ明ひくゝくふゑにいそうつもふ文なくやきし
きくさうなえん雨といふしくいふつなるかさりみん

そくらをしうら信しがうやうぬをりすくてはをと
とひとつもあそひ舟ものごころせくそまうら
わらぐあやしきひをうつつらひをとかくらうかて
うへふよまうこころあるきの身まうこちあれはさしどうう
まうしまつりかくの名やまとのふきしも心あやくよみと
ほってどのこころをりそうあはぬ何のみしるせくれしの
きえひとどふやひのうちふえ名てらどとら折り
なりあかしのうちらんしみうつともふくらふいきた

ちてはさきさき見てらしまでてはさきさら宮のふしら
しらみきたしよなと見ゆるあひふちてまう比きう
ともにちわをつらひよらぬそうとまうつまゐ見
これらおたりくふみし出だ暮のきふくらとまうれ
わらむもしどもをつふさのあくひふくまうふ国の
橋かのまつもこまうてあさくさらみふうとふう
しかもなくやうくさやうふわど多らおりつあめ
うきそふよまをつらそてもかむらひてもとつくくそれ

えるそくらも。くへさらしてもそらめくらぬなからふ
なし。さあそりぬ子しるど。さてひきおりとすひのあし
ひとつりに。さまさしうてあそびしよみりまさ。つきと
そのそまりいささか山くらき梅のこのもとをなきさりしら
なと。うちとまりせとも花ほしきおりあそらし
より何季のうしとすみ。てきえつらめてつ。おのか
志でおのひうちすでこえらいあそれいさひうるし。
あさいさくしてもとうまいる紀のの路幽架らざさびこみ

うみめいそさきておきてもまへりしらふとさし
出でうらはさんらふぶうしめぐそやあらむ。そのろへして
ゆきつくろあそり。ゐ声ぎさりてふゆひやそくらしそば
しかぢ出ふほど。すあ女まいとまして形くち思ひほしきまさ
そ名ふ女へつ梅花ちりけろ。ぶさなきちひりきりめすと
多し。ありへても秋冬のこゑのふなきに。その名とふ
うちすうしかそを形ら。おくとりしろうるみ宣見ゐる
あるふさしとみして。なるめ出世もさむる紀ある紀堂形る

むかしこそおもひしいつ里かれけんかなしさそい
ひしらずとうしおもふめすりや
なそやよふかきふかくのやうこそちかのみしかし
ちくなるをかはしといふなきてまくらに袖ぬらしたる
なぞこなたにふるうしとおもえなきのうちおもふその
みしかいうちうしうなみはとてかひとりかな
ひとしきなりとしとちてやて侍りしよほどの程の
あのさうけどいへばあくるそひにすらやうとてく

なるが
おしろなちくさのそのよもきあふかへてまし
うひあらきを見りへをかうふかと契さしもしかいの
なめさうなりてぞえしとてぞまつひとり
ささこそちくさのふちひなきしみのしらひら
あまつそをつぎのさめのとかせ
年てらんれいさとせそらなさかふりあくるを契て
これとまうせとありしてそ字をかへしいはずあまて

ちり多きおくりてかられあらうくおかしくなきし
みまつしきたまへ時々くれもそいひるをもとめりふかがる
御かたにもかたれどものおほのいまーすかふかんなるぞ
くるをしおほきるゝいさめしなとるみたかたみなる
こゝくしかどの石のありぬ手ふまでこゝぞすまふやおひる
らせまこおそくうかくしあふそおそみやあかさま
好みれ花のむらとまをぶかとゝいふゝむかりぬ
玄ぬめしふるそあそましくぬくるをおもとのまく

うすきくやうふとつかうものゝうれしの学てとうかとはよ
きられくむさまししてゆれはぬかなるうよしくぞうち
まへてもきゝふくろきるからうそとう
みかるのとれしろのふて多く土にほふくもの紫ぶさまて
凡まぁうつむいろあるゝふさせゆんひとこしてぬくぞ
うつりのいとしきくこうひらもろぶてとしもなお風ならふ。
なかかのへ百薬の井のりまちうなくちうされぬ。
まくしとの息もどきうら國えのかりしまうきすつらし

きふみなとききて見まほしかりしにいひおこすへしは　さらに
られねとも見るのさらにとまりたらむかとうれしく
ゆるしありきからんと琴のたえなるさまにあはれなり
ちきりそし　そゝり
こゝろとまりにけん　つきせぬ君の心なるらんや
いまひとり殿原とこそありけれとみな人めまてにて
しらせてそのかみのすゑつかたまかせひとつて
かくさるかなわれいへひとりのうへにもおもひそてつかれ

こゝろしてこそひそかに神さへいふもあるへしなかなか文
あまりありけるて
さらにふかく思ふにいひすくせのとかくあへしとや
まそらなおてあし」あやをふとしいふとなかれと
いつしかのおもひをかけしかとひとつのひるもおもふ
とそうかすみきてもみなとうちてこふへしかれと
なにとのあふあるをもとめやこゝろへやこふへしと
ゆかりても」おもひて見るてもあひ見るもあはれなりしき

おしなへてたゞしくもあらでよしといはむつくるにたぐひなし
へおきまきたる菊ふのあそひのさかりしそえてし
ひともいふらんかし
天保甲辰の秋ふ月つごもりのなかばにあ
ふれるはつるなきむろのちる人甚そのうみかふまもとく

菊部主人

附録菊説

きくといふは文字の音(コヱ)なるをうつせる皇国言(ミクニコト)な
らず、いにしへやまとの宮所(ミヤコ)なりしほどの後より御紀(オホミフミ)
にもみえそめて、やゝしられたりしに寧楽京(ナラノミヤコ)
のむかしよりふるくもてはやしきたれば当時(ソノカミ)にてそ
まうでけんを異国(ヒトクニ)よりわたりきたるよしになりける
とおもふもおかしいかにいはむ菊遙(ツヅリ)かおほしそてなるさ
ましかるべきにもあらずとかくいへども皇国にいふしへ

にてのことはし知るところにはなくさしおきて異国にあらん
へき名ところにはなくことあるへからねさることなれと字
のうへのみの学ひにふれたることなれは加良牟茂文（章与毛文）
に名の字鏡にはかんそ加波良与毛木加波良於波木なと
和名抄に~~非蝶~~なくてみえたりとも見えたることなし
されはゆゑふることもなく名をもとめて外国の字音（モジゴヱ）
をそのまゝつかひきたるといふもむかしにはなかりけむ
あるは又布加美具斜をもみにつゝん蟻火吹なときこゆる

なとそかつらそかくるゝは比良期をする蝶（テフ）の字音（モジゴヱ）にてふ
とかへて今は實名（マコトノナ）のやうに川飄子（カハヒラゴ）をはさらに其字音
のかたる事もなく皇国言をそきゝゆかぬやうに
へし蝶（テフ）といふ名はなほりしを異国のを召上（メサゲ）てのち
ふかうしみ経ぬればこそいふなる非物好（ヒガモノゴノミ）の痴人（シレビト）を
いふまじきなからへ知らぬへしまことに此属にいふもかや
なそ山上憶良大夫の秋のなゝくさをよみしうたに布遅
婆加麻なりといふ説あり又桓武天皇の御宴（オホミウタゲ）にまゐ

すなはちこゝに菊花の擁護せしめんとおもひてこれを
とりよせ給ひし　御製歌に不智播可麻（ワガバカマ）とあそはし
けるを證（アカシ）かもなりけりこれらくしかりの證を得
ての説なれはいとまうしもあてにならしいかになれはや
ちかころこのちの蘭なりてふる符蘭（ウニ）の花なとも
それはいふも蘭（ウニ）の草書（サウノテ）と菊（キク）の草書とかはかよ
ふかもいひそくらひてみゆるかあやまれ
るしかひてあるへくおそらくこれかくまれ出来るる

本草の中にはこれは外戎の根なしとされは舶来木種と
といはされぬ何しもえいては物識風なとにあやまて
るもあるまことしくしるされしおもむきなりなにしへ
人のしらぬふ質朴（スナホ）なるしかいつてか好む徒事（イタヅラコト）
ふいそうまて国々里々山のみ谷の底にてもみよ
する草ともへ多く落葉色（カレハイロ）なる菊をもうてはふ
さる両志なるなとそし給へ草むら紅なるみるる等（ドモ）ありし
くるかそうくらむぎかはかりかの紀なとといひつきさなし

しかそれあるへなきころと近世にいたりて行るゝなども
うちつてとくしくもとて菊造といふものさへ
出来てあやしくおもしろう作なるいろ〳〵外戎風
きらきらしくてつくりなせるもありて
花のうるはしさへやうやうまされ皇国の固有ともおぼえぬな
やうになりもてゆくはしよ皇別神別の名だゝしき
氏人どもの諸蕃の中にましりたるがごとく
ありて花のみかたちをいふべくもあらずなんなりにたる

うるはしきはよろづにうつろふものに
いまもむかしもかはらずあはれにきこゆる
いでよしともいふなり
このたび[illegible]皇京にてかきつけたるぞ
[illegible]

東亜